

子ども健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Neurodevelopmental outcomes at age 3 after moderate preterm, late preterm, and early term birth: The Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

予定日より在胎期間が短く出生した子どもの3歳時の発達状況: エコチル調査

ユニットセンター(UC)等名: 大阪ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Archives of Disease in Childhood Fetal and Neonatal Edition

年: 2023 DOI: 10.1136/archdischild-2023-325600

筆頭著者名: 平田 克弥

所属 UC 名: 大阪ユニットセンター

目的:

本研究では、短い在胎期間と3歳時での発達の遅れとの関連を明らかにすることを目的とした。

方法:

在胎 32 週から 41 週で出生し、単胎で先天異常がない、86,138 人の子どもを対象とした。3 歳時点の発達は、日本語版 ASQ-3 という質問票を用いて、5 つの領域(コミュニケーション、粗大運動、微細運動、問題解決、個人と社会)について評価した。社会経済的因子および周産期因子を調整した後、在胎 32-33 週、34-36 週、37-38 週で出生した子どもが、在胎 39-41 週で出生した子どもと比較して 3 歳時点での発達評価に違いがあるかを検証した。

結果:

在胎期間が短い子どもほど、在胎 39-41 週で産まれた子どもに比べて、3 歳時点のコミュニケーション、粗大運動、微細運動、問題解決、個人・社会の領域のそれぞれにおいて、発達の遅れのリスク上昇と関連していた。

考察(研究の限界を含める):

重度の早産ではなく、少し在胎期間が短い場合であっても、発達の遅れのリスクがある可能性が示唆された。発達の遅れを早期に見出し、適切な介入を実施するためには、小児科医や、保健師などの医療従事者による注意深いフォローアップが必要である。本研究の限界として、子どもの分娩施設の情報を検討できなかった点があげられる。

結論:

短い在胎期間は、3 歳時での発達の遅れと関連していた。